

翌三十日所持品検査、妻が母よりもらったたいせつな真珠の指輪を中国女子検査官に没収された。ひとり千円と持てる範囲の身回り品。余談ながら帰国者が残した荷物、フトンだけでも三メートルを越える山が十五以上。首に子どもを吊るしているので荷物は持てない。列車に乗ってターク港へ、そして乗船。米軍の上陸用舟艇の換気は悪く、長男がまた発熱、幸運にも医者がおられたが、衰弱ははなはだしく上陸まで持つか、子ども一人が死に、水葬されたと聞き、心ここにあらず。神仏の加護を祈るのみ。

五月四日、佐世保沖に到着。歓喜の瞬間。五月五日に上陸。米軍のDDT消毒後、婦女子と荷物はトラックで収容所へ。男は雨の中、徒歩で四キロの山越えして収容所。翌日医者に子どもを受診、注射をしていたのだが、衰弱で吸収されず、化膿。五月七日、故郷兵庫県但馬へ。妻の父が神戸で健在であると聞き、三人で神戸へ。更に母の疎開先岡山県津山へ。また、長男が発熱し、小さな街の病院に入院。良く良く強い運命か、快方に向かい六月十一日に退院。

私は、義父の建築材料商を手伝う。二十三年、大手造船会社に就職。重労働のため肺浸潤となり、二十か月療養、治癒して再出勤、管理部門に転場。五十八年定年退職。さらに再就職、年金生活現在にいたる。

## 主人を凶漢に襲われ

### 子供二人と引揚げて

山形県 齊藤 登代

昭和二十一年五月五日、酒田市に長女と三女の遺骨二つを抱いて引き揚げてきました。二十一年三月末になってやっと引き揚げが開始されアメリカの舟艇母艦に積み込まれ天津のタンクウ港より乗船いたしました。佐世保上陸は二十一年五月一日、酒田に着いたのは五月五日でした。故郷に辿り着いた私達は、乞食よりひどい姿でした。強度の栄養失調で、実家にて清浄な身体になるまで養生できたことは何よりの幸いでした。

渡支の動機。亡き主人は教員で昭和十五年三月外務省

外地出向辞令により渡支。当時の年齢は二十六歳。私は二十一歳でした。昭和十五年三月三十日。酒田をたち、五日目に北京到着。大陸の広大さに感激しました。中国人は親切で中国の生活の第一歩が始まったわけです。

しかし、二十年終戦後、日本の行政機関、学校すべて閉鎖され、一般居留民の治安は悪化するばかりでした。私は二十年の十月に三女の出産を迎えたのですが、分娩を取り扱ってくれる助産婦もおらず主人が医学書を頼りに、理科実験器を消毒して自分にまかせろ心配するなと、隣の奥様に手伝って戴いて無事に出産することが出来ました。あの感激は生涯忘れることが出来ません。

治安は日に日に悪くなっていったが、また困ったことに子供達に伝染病チフテリアや百日咳が蔓延し、付近の子供ら半数近くが死亡したのです。私の子供も三人共感染し、次女が一番体力がなかったでしょう、一歳九か月で親の看病だけで治療も受けられずに死亡しました。二十年十二月十九日身を切られる思いでした。

二十一年一月十九日主人の死に直面することになりました。零下二十度の寒い午前十時頃、暴徒十数人が来襲

し、隣の奥様の悲鳴に一戸建の官舎だったので主人が門を開けると同時に胸部心臓部をひと突きで、殆ど即死の状態にて庭に倒れたようです。隣のご主人は応召中で出征時に留守中の家族のことを頼まれていたので門を開けたようです。私は子供二人と何が起きたのかもわからずにいきました。そのときまた二人の賊が家の中にはいつてきて四歳の長女が泣きだしたので首を絞められたのです。私は賊の手に噛みつき子供を奪い取ると、とっさに押入れの中に隠れました。そのとき、私は背中から刺されたようです。その後、賊は屋根づいたに逃げたのとことでした。近所の先生方が駆け付けてくれて主人を家の中に運んでくださいましたが、一言もなく亡くなってしまいました。あまりの突発的イベントのため茫然自失の私も相当出血していたのですが気づかず、先生方から応急手当をして戴いたのですが後で聞くと心臓部にあと五ミリだったそうで命拾いをいたしました。最近の中国孤児のテレビを見る度に、私も死んでいたら二人の子供達も死んだか孤児になったのだと思うとゾッといたします。

引き揚げ後、まだ二十六歳だった私は子供を育てるた

め自立の道として助産婦の資格を取り、以後現在も医療に携わっておりますが、いまでも私は、故人になった主人が私達を守ってくれているのだと思ひ感謝いたしております。

## 化粧品と共に

兵庫県 三鼓 安治

学校を卒業して以来海外生活がつづき、支那語を武器として、終戦引揚げまで、化粧品原材料の輸入、販売業を営み、満州ではパイオニアとなるまで発展した。家族は妻と四女と五人家族、現在、子ども等は結婚して、平和な家庭をつくっている。

戦争が悪化し、戦時体制が強化され、物資が減少、統制強化で、企業者の合同、現地生産等、自給自足の開拓等で取扱商品も輸入もしだいに困難となって、現地生産に傾き、当方もコルク材を満州国内で自給するため、社員を派して調査を始めた。また、一方杏子種子を集荷

して搾油して、医薬品生産、化粧品生産、あるいは、齒磨生産をはじめ、東亜齒磨として、サンスター、ライオン齒磨に対抗すべく生産に乗出した。日本人社員は応召不在とあり、残る中国人社員と私一人。昭和二十年八月十四日、ついに私に召集がきた。妻より電話で午後二時までに静浦小学校に集合するように命令があったことを午前十一時に連絡があり、いそいで帰宅しました。中国人従業員に相談する時間もなく、中国人も驚いて、なにひと言も話せずに別れました。

また妻に対しても、これまた、話をする暇もなく、小さい子どもを四人を連れ、動転した気持ちであったと思います。

そのとき、長女十三歳、次女十一歳、三女四歳、四女生後四か月

同日夕方七時頃、妻は心配と不安で集合場所の静浦小学校へ子どもを連れて面会にきました。私も初めての応召で心も落ちつかず、話そうとせず、さびしく別れたのでした。妻が今後一人でどうなることか、とひじょうに不安といらだちの日が続くと思うと可哀そうに思いま